「キリスト・イエスにある聖徒たち」

エペソ人への手紙 1 : 1 - 2

June.13.2021

エペソ人への手紙 1 : 1 - 2 (パウロ)

Preface

先週まで、旧約聖書のダニエル書から神様の御言葉を学んできました。

そして、今日からしばらくの間（しばらくと言いましても年単位になると思いますが）は、新約聖書のエペソ人への手紙から神の言葉を学んで行きたいと思っています。

特に、神様が私たちキリスト者にお与えくださった計画と祝福がどれだけ偉大で、どれだけ栄光に富んだものであるのかを悟らされながら、その恵みが、私たちの血となり肉となっていく幸いを味わえたらと願っております。

エペソ人への手紙は、その名の通り、エペソという今のトルコ西部に位置する古代都市のキリスト者たちに、使徒パウロが書き送った手紙だと思われていますが、違うかもしれないという見解もあります。

と言いますのも、1節に「キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ」という宛て名から、「エペソ」という地名を欠いている写本があり、エペソ書の内容がことさらに、エペソ教会にとって必要な内容なので、後に「エペソ」と書き入れたという見方もあります。

そう言われてみますと、確かに、使徒パウロが書いた他の手紙とは少し違う趣があります。

新約聖書にあるパウロが書いた手紙の多くは、手紙の受け取り手である教会に起こった問題に対応するために書かれました。

例えば、コリント人への手紙は、教会内にある分派や賜物の問題のために書かれたものですし、ガラテヤ人への手紙は、古い律法主義に後戻りしようとすることへの警告のために書かれました。

また、テサロニケ人への手紙は、教会の信徒たちがキリストの再臨について混乱を来たしていたために書かれたものです。

しかし、エペソ人への手紙は、教会に起こっている特定の具体的な問題に対応するために書かれたというよりも、イエス・キリストを信じるキリスト者たち皆が知っておくべき、教会とは何なのか？ またそれに付随したイエス・キリストとはどういうお方なのか？ という教会論やキリスト論などの神学的な基盤を堅

固にしてくれるような内容となっています。

エペソ書は、問題が先ではなく、すべての問題に対応し得る土台となる神の奥義について語っています。

なので、エペソ書は、エペソ人クリスチャンたちに向けて書いた手紙かもしれませんが、そうでなかったとしても全く問題ありません。

手紙の読み手がクリスチャンであるならば、これは一体全体何の話？ということにはならない、置かれた状況や環境に関わらずすべてのクリスチャンたちに重要で必要な内容になっているのが、エペソ書なんです。

Part One

エペソ書の中心的内容は、「教会とは何なのか？」ということですが、結論から言いますと、「教会とは何なのか？」という質問自体が、間違っているということをずっと語り続けます。

使徒パウロは、「教会とは何なのか？」と質問するのではなく、「教会とは誰なのか？」という質問こそ、よりの確な質問で、この「教会とは誰なのか？」「誰が教会なのか？」という問いを、エペソ書の中で掘り下げていきます。

私が6年前アメリカの神学校に入った時、博士課程でしたので、本来履修する科目はすべて選択科目で必修科目が無かったのですが、多くの学生たちが中々論文が書けずにもあまりにも卒業率が悪いので、このままだとその課程自体の存続が危ぶまれるというので、卒業率を上げるために、入学したらすぐに受けなければならない必修科目が一つできていました。

「**Research Design**」という科目なのですが、卒業論文の書き方について教えてくれる科目だったんです。

まだ日常生活もままならず、授業を一つも聞いていない状態で、入学してすぐに「学位論文を書く準備と心備えをしないと卒業できませんよ！」と脅されながらの授業でした。

でも、この授業が後になってみたら本当に助かりまして、この授業が無かったら、たぶん私は卒業できなかったと思います。

で、その授業の中で、ひとまず入学した時点で論文にしたいテーマを考えて、論文の序論部分を作成してみるという課題がありました。

そして、その序論部分で最も大事な項目が、**Research Questions** だと言うのです。

直訳しますと、研究質問ということになりますが、この定めた研究質問に答える形で論文を書き進めて行くことになるんです。

だから、このリサーチクエスション次第で、論文の道筋や行く末が決まってしまうので、ある意味論文の序論の中で最も大事なものになるし、「このリサーチクエスションを実際決める時には、指導教官から何度も書き直しを命じられることになる」と言われました。

何で今この話をしたのかと言いますと、私たちが教会を考える時、「教会とは何なのか？」というふうに、あたかも自分とは少し距離を置いた物体を審査評価するような疑問質問を持ちがちですが、

使徒パウロは、エペソ書の中で、始めから最後まで、『教会とは何なのか？』ではなく、『教会とは誰なのか？』『誰が教会なのか？』という質問こそ必要な質問であり、キリストにあって一人の成熟した大人のようなキリスト者へと達するために、適切な道筋をつけてくれる質問だ」と一貫して言い続けます。

つまり、自分自身と距離を置いて少し離れたところで、「教会とは、ああでもない、こうでもない」と何かの物体のようなものについて審査評価し合うのが教会ではなく、「教会とは、人間なんだ！ 教会とは、私たちキリスト者のことなんだ！ 教会とは、あなた自身であり、私自身のことなんだ！」と、少し離れたところに置いた軸を、自分という人の真っ只中に持ってきます。

要するに、「教会とは他人事ではなく、自分事なんだと、私事なんだ」と言うんです。

もし、「教会とは誰なのか？」「誰が教会なのか？」という質問に立たないならば、

自分のお気に召す、耳に心地の良い説教をしてくれる教会が見つかるまで教会を放浪し、

礼拝のスタイル・趣向・雰囲気、自分のスタイル・趣向・雰囲気に合う教会が見つかるまで渡り歩き、

さらには、礼拝堂の内装が気に入らないとか、掲げられている十字架の色が気に入らないとか、牧師の容姿がちょっとねという理由で、教会を移ったり、来なくなったりするようなことが、起こってもおかしくありません。

教会を「クリスチャンである私自身だ」と、自分事として捉えずに、他人任せな教会観しか持てないならば、こういうことは十分に起こり得ることですし、現に起こっているでしょう。

「教会とは、キリストを信じる私自身だ」という信仰的責任感を持った、エペソ書の教える教会観に立てないならば、

どこまでいっても人のせいですし、どこまで行っても自分の過ちや暴力性を

認めることも出来なければ、ひたすらに他者を攻撃し、非難し、自分の正しさばかりを表そうとするでしょう。

そして厄介なことに、当の本人はその事には気付かず、「これすべて、教会という組織はこうあるべきだ」という正義感ゆえの行動ですので、自分の正しさばかりが、自分の中で浮き彫りになっていきます。

Part Two

これに対して使徒パウロは、エペソ書の最初の自己紹介から、「キリスト者自身が教会であり、私こそ教会である」という信仰的責任感と使命感に立脚した教会観を表明します。

エペソ人への手紙 1 : 1 (パウロ)

(神の～から、)

もうこれ以上パウロの人生は、「神のみこころ」と「キリスト・イエス」を取り除いては成立しない人生です。

その人生において、キリスト以外、「私」という人の立つ瀬はもうこれ以上ありません。

生粋のイスラエル人である前にキリスト者、特権階級のローマ人である前にキリスト者、社会的エリートである前に、まず第一にキリスト者です。

キリスト者であることが、パウロにとって最も大事なアイデンティティーで、これなくして、パウロを語ることも出来なければ、パウロはいません。

会社員である前にキリスト者、学生である前にキリスト者、母で父である前にキリスト者、誰かの子どもである前にキリスト者、奴隷である前にキリスト者、主人である前にキリスト者、軍人である前にキリスト者、農夫である前にキリスト者、漁夫である前にキリスト者、研究員である前にキリスト者、公務員である前にキリスト者、何かの職人である前にキリスト者、何かの選手である前にキリスト者、何か他のどんな肩書きを前にしても、キリスト者であることが第一です。

そして、そのキリスト者が信じるキリストを、神様はどうされたのかと言いますと、

エペソ人への手紙 1 : 2 2 - 2 3 (パウロ)

「神は、天地万物すべてのものをその足の下に従わせたキリストを、教会のかしらとし、教会はキリストのからだだ」と言います。

では、「キリストのからだだと言われるその教会は、何でできているのか？」
と言いますと、

エペソ人への手紙4：11－16（パウロ）

つまり、キリスト者一人一人が教会です。

「誰が教会なのか？」

私たち一人一人が、キリストの体であり、教会です。

そして、その教会である私たちは、「神のみこころ」によって生きる者たちです。

「神のみこころなのか？」、「私の思いなのか？」と考えた時、「神のみこころによって生きるのが、教会である私たち一人一人のクリスチャンだ」と、

「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから」という自己紹介文を通して、パウロはさらりと言っただけ、表明します。

さらには、この使徒パウロの表明を、距離を取って遠くから眺めるのではなく、「あなたがたも私と同じように、自分の思いではなく、神のみこころによって生きるキリストのからだという教会そのものなんだ」と、エペソ書全体に渡って、丁寧に教え諭してくださいませ。

使徒パウロは、私たちもよく知っていますように、口にするだけでも、苦しくなるような、その痛みが伝わってくるようなありとあらゆる苦難を、キリストにある神のみこころゆえに経験しました。

死ぬ一歩手前までむちを打たれたことが五度、難船難破したことが三度、盗まれ、飢え渴き、寒さの中裸でいたこともありました。

そして、そのすべてが、私の思いに従ったからではなく、神のみこころによるものだったために、誇らずにはられませんでした。

自分自身を誇ったのではありません。

キリストを誇らずには、られませんでした。

なぜなら、パウロ自身キリストの中にあり、キリストがパウロの中にいてくださり、キリストと一体のからだだからです。

Part Three

ヨハネの福音書15：4－7（パウロ）

信仰とは、私の思いや私の計画ではなく、すべてのものがイエス・キリストか

ら始まった、イエス・キリストから始まるというのが信仰です。

信仰とは、イエス様が私の中にいてくださり、私がイエス様の中にいるということです。

このお方から離れては何も生まれることはなく、何もなされることはありません。

枝がぶどうの木にとどまっていなければ、枝自身では一切の実を結ぶことが出来ないように、私たちキリスト者がイエス・キリストにとどまり、イエス・キリストがすべての根幹でないならば、何も生まれることもなく、何もなされることもなく、何も起こりません。

何かが起こった、何かが生まれた、何かが出来たと思っても、またどんなに多くのことをしても、どんなにたくさんの仕事をしたとしても、

もし、キリストにとどまり、キリストがその内にいないならば、神ともキリストとも何の関係もない、投げ捨てられて、枯れて、集められて、火に投げ入れられて、燃やされて、終わりです。

そしてさらに、7節ではこう言います。

ヨハネの福音書 15 : 7 (パウロ)

「何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」
何て魅力的な言葉なんでしょう！

「この言葉だけが独立して、独り歩きしてくればいいなあ」なんていう、欲にまみれた悪しき思いが湧いて出て来てしまうほどに魅力的な言葉ですが、この言葉に必要な不可欠な大前提は、「あなたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら」です。

これが、最大の必須条件です。

主イエス様が私のうちにいてくださり、私が主イエス様のうちにいる一体のからだならば、イエス様のみこころに合うことを欲し、イエス様のみこころに合うものを求め、イエス様のみこころを願うようになるということです。

手と足の行く方向が違う生き方ではなく、頭から出された指示に反する方向に手足が動くようでもなく、

かしらであるキリストから出された指示に喜んで、それこそ我が望みだと従い、また、かしらが喜ぶ、私たちの脳に例えるならば、脳内で喜ぶための物質が分泌されるために手足が動いていくということです。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます」という言葉の意味は、

「私がキリストの中において、キリストが私の中にいるならば、キリストのみこころに合わないものは求めなくなる」ということです。

私がキリストのうちにあり、キリストが私のうちにおられるということが、信仰の本質であり、キリストをかしらとし、そのからだである私たち教会の本質です。

だから、使徒パウロは、苦難の先にある豊かな実りを望み見ることが出来、苦難を通った自分を誇るのではなく、キリストを誇れる者となったわけです。

キリストが我が内におり、我がキリストにある一体のからだであるということ、ダビデはこんなふうに謳います。

詩篇 71 : 5 - 9 (パウロ)

生まれた時から、年老いて力が衰えはてても、主こそ拠り所であり、避け所であり、抱かれ、賛美と主の栄えが食わず満ちていると歌います。

それまで、私の思いや私の計画に生きてきた者から、すべてのものが神から発し、すべてのことを神のみこころによって生きる者へとされるのが信仰者であり、パウロの言う忠実な聖徒です。

Part Four

一方、世は、すべてが私という人から始まります。

私の考え、私の思い、私のしたこと、私の持ち物、私という存在、私、私、私、私、「終わりなき私の世界」、「私」が蔓延っているのが世の中です。

SNSという媒体が世の中を牛耳っていると言っても過言ではない世界を私たち生きていますが、その中身は、ほぼすべて私です。

私のことを知って欲しいということだらけです。

私のことを発信することで何か特別なものが生まれ、私を分かってもらうことに解決があり、私を知ってもらうことが道であると思っていますが、その中身は、終わりなき果かない刺激と虚無感が交差するばかりです。

もちろん、そこには一定の楽しみがあり、笑顔もありますが、キリストに繋がっていないものならば、果かないものであることに変わりはありません。

パウロは、自分を紹介するにあたって、自分のことを紹介するにもかかわらず、そこに「私」はいません。

そこにあるのは、イエス・キリストと神のみこころだけです。

なのに、何よりも「私という人が価値ある存在で、私という人が尊くて、私の歩んでいる道は栄光で、そんな私に約束されているものがどれほどすばらしいのか」という、比類なき「私」がキリストにあって鮮明になっています。

Part five

そして、このパウロの自己紹介文「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから」という表現を、手紙の受け取り手に当てはめて言い換えているのが、その次の「キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ」という言葉です。

エペソ人への手紙1：1（パウロ）

「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロ」と「キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たち」というのは、同義語です。

つまり、私の思いではなく「神のみこころは何ですか？」と訊く者が、忠実な聖徒です。

ここに出てくる「忠実」と訳されている言葉は、私個人的には誤訳だと思っているのですが、

この「忠実」と訳されている言葉は、本来ピストイスというギリシャ語で、信仰とか、信じるという意味合いの言葉ですので、「忠実な」ではなく、「信心深い」とか、「信仰に厚い」と訳した方が、より明確な訳になると思います。

今ここで、パウロがピストイスという言葉に込めた思いは、“教会とは信じる者たちの群れである”ということです。

何を信じる群れなのか？

イエスがキリストであることを信じる群れ、

イエス様が私たちの罪のために十字架に架かれ死に、復活し、天に昇られ、再び来ることを信じる群れ、

永遠のいのちと天国を信じる群れ、

永遠の刑罰と地獄があることを信じる群れです。

この信仰を持って生きる者たちこそ、私の確信、私の考え、私の経験、私の主張を信じるのではなく、神のみこころ、イエスがキリストであるということを知る忠実な者たちです。

そして、この信仰が確かな者一人を通して、中東・ヨーロッパが変わり、たった一人の忠実な信仰者パウロを通して、全世界に数えきれないぐらいの教会が誕生しました。

私たちの信仰は、人数が多いか少ないかが、問題ではありません。

私たちの誰か一人だけでも、キリストを信じることに全精力、すべての力を傾ける人がいるならば、神様はその人を通して事をなされるでしょう。

キリスト信じるとは、キリストを知ることでもあります。

どんなに信じようとしても、知らなければ信じられません。

果たして私たちは、キリスト知るために、どれほどの努力を傾けているでしょうか。

私たちは、キリストを知るほどに、キリストを信じる事が出来ます。

また、「聖徒」という言葉ですが、聖書に出てくる「聖」という言葉は、「区別された」ということを意味する言葉ですので、「聖徒たち」という言葉を直訳するならば、「区別された者たち」ということです。

では、何から区別されたのか？

その生き方が、私という人から始まるのではなく、「神様から始まる」という点で区別された者たちだということです。

そして、「神様から始まる」ということを言い換えますと、「キリスト・イエスにある」という言葉になります。

つまり、神様から始まるということは、イエス・キリストによることであり、イエス・キリストによるということは、神様に繋がることです。

1節で、「キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ」とパウロが言っていますが、この「キリスト・イエスにある」という言葉は、エペソ書に30回以上出てくる核になる表現です。

即ち、キリスト・イエスにある者たちこそ、聖徒であり、信仰に厚いものであり、私ではなく神のみこころがその人生の土台であり、根拠である者たちです。

そして、その者たちこそ、教会です。

Conclusion

使徒パウロが、自分のことを「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロ」と自己紹介した後に、それと同じ意味である「キリスト・イエスにある忠実な聖徒たち」と呼びかけたのは、

手紙の受け取り手たちにプレッシャーを与えるためでもなく、負担を課した

めでもなく、「私たちキリスト者みんな、主イエスのうちにあるがために、その尊い神の子という地位が、決して奪われることはない」という励ましとその事実を共に共有するためです。

私たちクリスチャンたちが覚えなければならないものの一つが、「主の愛と永遠の祝福から取り消されることはない」という事実です。

なので、今どんなところを通過していたとしても、今ここに至るまでにどんな失敗や挫折を経験しても、それすべてが、私たちをキリストの身丈にまで達するために用いられていきます。

だから、不必要に人を責め立てる必要もなければ、不必要に自分を正当化する必要もありません。

ただそこに必要なのは、寛容と忍耐です。

エペソ書は、最初に話しましたように、「教会とは誰なのか?」、そして「教会のかしらであるキリストというお方なのか?」について書かれたものですが、その視点は、「将来、手にするだろう永遠の栄光」という視点から書かれました。

つまり、今がすべてではないんです。

この人も、あの人も、私も今がすべてではなく、このことも、あのことも今がすべてではなく、主にあつて永遠の栄光と御国を受け継ぐにふさわしく変えられている道程にあるんです。

その道程での有り様が、人の目から見て足りない、そぐわない、相応しくない、未達だと思えるかもしれませんが、それは所詮人の考えることです。

私たちキリストのからだであり教会であるキリスト者たちは、将来もたらされる究極的な栄光と、神のご計画の素晴らしさゆえに、今という時に意味を見出しながら、しっかりと生きることが出来ます。

今は、キリスト者誰もが、究極の栄光のために、素晴らしい神のご計画の中で錬られている最中です。

未完成です。

にもかかわらず、使徒パウロは、まず自分自身のことを、「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロ」と表明し、

そしてまだ未完成なキリスト者たちを、「キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たち」と呼ばわり、断言します。

キリストの教会である私たち一人一人も、このようなパウロの告白と表明に倣い、表現しながら生きたいものです。

お祈りいたします。

祝祷：ヨハネの福音書 15：5